

# 大学生の運動部離れの分析

佐 多 直 温

## 1 大学生の運動部離れの分析

過去の歴史からみて、各競技の導入や普及に果たした学生の役割は大きいといわれている。また今日のスポーツ・ブームの地盤を築いたのも、学生であったと言っても過言ではないであろう。その大学スポーツが、いまや隆盛を失って低迷をはじめて久しい。その原因も様々であるが、受験競争がきびしくなってきたこともその1つであろう。指導者の質、学問と運動の両立の難しさ、施設の貧弱さ、若者気質の変化と衰退への要因は少なくない。「揺り籠から墓場まで」という合言葉のもと、生涯スポーツの必要が説かれて久しくたつ。その成果が、幼稚園や小学校、中学校には、確実に現われている。受験地獄と言われながら、多くの高校生が、早朝練習や放課後の練習で脂汗を流している。この様な傾向が強まる一方で、大学では運動部への入部者が激減しているのである。入学して来る多くの学生達は、スポーツは大好きである、スポーツをやりたいと言う一方で、いまさら苦しいことはいやだ、面白く、気晴しとしてのスポーツ活動ということで、昨今は、愛好会とか同好会的なものへの入会者が非常に増加している。私が大学で運動部の指導をするようになって20年有余になるが、40年代の後半から急速に新入部員の獲得が難しくなった。大学入試が難かしくなってきたことの影響が大きいと思う。しかし、運動部経験者がいないかというとは決してそうではないのである。県大会以上の大会参加者は3割ほどいるのである。学生スポーツの衰退は、部員不足ということが大きな要因である。運動経験者が、運動は大好きであるという人達が、何故入部しようとしなないのか、私にはどうも理解できないのである。また明確な解答も何一つみあたらないのである。そこで、今回は、私たちの周囲にいる学生に対して若干のア

ンケートを試み、その謎解きに挑戦してみた。

## 2 方法について

アンケートの対象者は、愛知大学豊橋校舎の体育実技に参加した423名の男子学生で、その内訳は、1年生・333名、2年生・41名、3年生37名、4年生・12名であった。アンケートは、61年4月末日から5月末日までの1ヶ月間に行った。回収率は100%であった。

## 3 結果と若干の考察

調査対象者の特性として、出身地、居住形態、通学時間については、表1、表2の通りである。表2は、昭和57年に愛知大学の体育研究室が実施して、新井野洋一によってまとめられた「体育実技受講学生に関する基礎的検討」の中から抜萃したものである。これによると愛知県出身者が77%で、岐阜、三重、静岡の三県で17.7%となり、東海4県外からの入学者はわずか5.3%にすぎなかった。居住形態は、約75%が自宅と答えている。下宿、間借、アパート等自宅外とする人が約24%となっている。通学に要する時間は、15分以内と答えた人が約24%いたが、90分～120分が約22%、60分～90分が約20%となっており、江刺正吾によると学生の平日の生活時間構造の中で往復の通学時間約1時間30分が平均で、20%以上の学生が約3時間を要している。大学生の通学圏がかなり広範囲にわたっていると指摘されている。今回の調査では、学生

表1. 対象者の出身地について

1. 豊橋市内	11%
2. 名古屋市内	20%
3. ①・②以外の愛知県内	46%
4. 岐阜県内	10%
5. 三重県内	3%
6. 静岡県内	4.7%
7. その他	5.3%

表2. 調査対象者の諸特性

現住所	豊橋市内	30.9%
	豊橋市以外の愛知県内	63.6%
	岐阜市内	1.6%
	三重県内	0.3%
	静岡県内	3.7%
居住形態	自宅(親と同居)	75%
	食事付きの下宿	4%
	間借・アパート・賃貸マンション	15.2%
	寮	3.3%
	合宿所	0.3%
通学時間	その他	1.7%
	15分以内	23.0%
	16分～30分以内	9.4%
	31分～60分以内	14.2%
	61分～90分以内	18.4%
	91分～120分以内	21.9%
	121分～150分以内	8.7%
	151分～180分以内	4.0%
	180分以上	1.4%
	NA	1.1%
サンプル表		1175人

表2は「体育実技受講学生に関する基ゾ 検討」第1回調査報告書より

表3. 体力に対する自信について

質問事項	1年	2年	3年	4年
1. 自信がある	13%	17.5%	13.8%	33.4%
2. 少し自信がある	41%	37.5%	50%	41.6%
3. 自信がない	41%	45%	36%	17%
4. 全く自信がない	6%	0	0	8%

が往復の通学に要する時間が、3時間以上かかるものが22%で、2時間以上かかるものが20%となり、半数近くが通学のために時間を要していることがわかる。新入部員を勧誘するときに、よく耳にすることであるが“帰りが遅くなるから”と言う。ここらにも解決しなければならない問題があるような気がしているのである。

次に学生達の現在の体力について、どのように認識しているかと考えて、体力に対する自信の程を聞いてみた。結果は表3の通りである。

昭和57年度の調査では、体力に対して自信があるほうか少ないほうかの質問に対して、全体の約半数が、自信がないほうだと答えていると報

表4. 運動神経への自信について

質問事項	1年	2年	3年	4年
1. 優れている	8.5%	10%	11%	15%
2. どちらかと言えば				
優れている	50%	53%	56%	46%
3. 劣っている	34%	35%	31%	23%
4. 大変劣っている	7%	3%	3%	15%

告書にまとめられていたが、今回の調査では、やや「自信がある」と答えたものが多くいた。18才から19才が青少年の体力のピーク年令であるといわれている。体力不足を感じる人が、約半数近くいるということも生涯スポーツの必要を提唱していくときに、考えなければならないこととなるのではないであろうか。

表4は運動神経への自信についての結果である。

昭和57年度の調査によると「劣っているほう」と答えたものが約41%で、「優れているほう」と答えた人が約41%で、「わからない」と答えた人が17%いたと報告されている。これも体力の自信度と結果はほぼ同様のパターンで、今回の調査では「優れているほう」と答えた人が多少ではあるが多くなっている。次に小学、中学、高校時代に運動部に所属した経験について調査した。まず、何かスポーツの部活動の参加の有無について調べたところ、91%の学生が「ある」と答え、「ない」と答えたのはわずか8%であった。尚、「ある」と答えた91%のうち約11%の人が途中で止めたと答えている。

表5は、運動部に所属した経験があると答えた人たちが、小学、中学、高校時代に所属した運動部の種目について書いてもらった結果である。

表の通り、小、中、高ともほぼ同じような種目のクラブが上位を占めている。特に中学、高校での運動部の経験内容は、ほぼ平均的なものとみることができる。この様な傾向は57年度の調査結果でも指摘されている。また、同調査で中1から高3までのスポーツクラブへの所属率の変化についてまとめられたものによると、年々クラブへの所属率は低下していることが明

表5. 小・中、高時代に入部したスポーツ種目ベスト6

小学時代		中学時代		高校時代	
①ソフトボール	70人	①バスケット	46人	①サッカー	27
②サッカー	69	②卓球	44	②硬式野球	24
③軟式野球	66	③軟式野球	39	③バスケット	23
④水泳	33	④軟式テニス	37	④バレーボール	22
⑤剣道	27	⑤剣道	32	⑤軟式テニス	21
⑥バスケット	27	⑥バレーボール	30	⑥卓球	18

表6. 所属した運動部の場所

	小学	中学	高校
1. 学校のクラブ	63%	93%	92%
2. 地域のクラブ	32%	4%	3%
3. スポーツセンター のクラブ	2%	2%	3%
4. その他	2%	1%	2%

表7. 運動部入部のきっかけは？

	小学校	中学校	高校
1. 運動が得意で あったから	23.3%	26.7%	28.8%
2. 先輩に進められて	2.3%	7.8%	10.9%
3. 友達に進められて	28.6%	24.9%	22.3%
4. 学校の先生に進め られて	11.7%	3.3%	5.5%
5. 家の人に進められて	11.4%	4.5%	1.8%
6. その他	22.7%	32.7%	30.6%

らかになっている。今回の調査からもそのような傾向にあることがうかがえる。ここらにも受験競争のきびしさと、運動部の運営の難かしさの一端をみる事ができる。

クラブ所属経験は、どこが行なっているクラブに所属したのかを聞いてみた。

小学生では、32%の地域スポーツ・クラブに所属していたという人がいた。地域スポーツの振興が進んでいることがうかがえるが、中学生、高校生では、そのほとんどが学校のクラブ所属となっていた。

次に、運動部に入部したのは、自分の意志なのか、それとも誰かに進められてのことなのかについて聞いてみた。

「運動が得意であったから」とする人が、上

表8. 入部の目的について

	小学	中学	高校
1. 健康のため	16.7%	16.7%	14.3%
2. 気晴しのため	3.8%	2.1%	5.0%
3. 友達をつくるため	16.0%	15.6%	20.5%
4. スポーツが上手に なるため	42.3%	42.2%	34.9%
5. 強い人間になるため	4.8%	7.8%	12.6%
6. 礼儀正しい人間に なるため	5.4%	3.6%	3.9%
7. その他	10.9%	11.9%	8.6%

学年へと進むにつれて増している。「友達に進められて」は、仲間を大事に、また仲間を求めて人との触れ合いを求めている現われではないのであろうか。小学生では、学校の先生とか家人の進めがかなり影響を及ぼしていることがわかる。「強くなりたかった」とか「上手になるために」とか、いじめに対する腕力を身につけるためと思われるものや、学業成績をあげるためのようなものがあり世情を感じさせるものもあった。次に運動部へ入部する目的について聞いた結果が表8の通りである。

運動部への入部は、当然のこととは言え、技術の取得、上達を求めている人が半数近くいた。仲間を求めて入部しているのだなあということも再確認した。

次に運動部での実際の活動状況について、練習日程、時間、指導者について調査した結果である。

表9、表10が練習日数と練習時間についてである。

構成人数、施設状況などで日数、特に時間は

変わると思うが、中学、高校では8割が1週間に6日～7日練習しているとしている。時間も2時間～3時間が約半数近くあった。好きで、そして技術の上達を求めて入ったクラブできびしい練習を毎日、2～3時間行ったのち、入試のため途中で中断され、合格を勝ちとった彼らは、1ヶ月近くの空白の生活を送る。そして、入学の後、「もうきついことは結構です」と言わせていることとつながってはいないのであろうか？

指導してくれた人は、学校の先生と答えたの

表9. 練習日数

	小学	中学	高校
1. 一週間に2日	23.9%	3.6%	5.5%
2. 〃 2日～3日	12.9%	2.4%	2.9%
3. 〃 4日～5日	15.5%	10.1%	12.8%
4. 日曜日以外毎日	27.5%	37.0%	46.9%
5. 毎日	9.4%	45.9%	30.0%
6. その他	10.6%	0.8%	1.8%

表10. 一日の練習時間

	小学	中学	高校
1. 1時間以内	16.2%	1.8%	2.6%
2. 1時間から2時間	42.2%	23.0%	18.2%
3. 2時間から3時間	29.5%	49.4%	41.3%
4. 3時間以上	10.7%	22.4%	16.7%
5. それ以上	1.3%	3.2%	2.7%

表12. 学校の先生の担当科目

	体育	理科	社会	音楽	図画	数学	美術	国語	英語	技・家	その他
小学	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
中学	81人	40人	44人	2人	2人	36人	7人	25人	25人	18人	37人
高校	108人	17人	25人	3人	0人	28人	2人	14人	21人	3人	29人

表13. 指導者の人物像について

	小学	中学	高校
1. 非常にきびしくてこわい人だった	15.8%	19.7%	11.5%
2. きびしかったが熱心な人だった	43.2%	39.7%	39.2%
3. 優しい人だった	23.2%	11.6%	13.7%
4. 面白い人だった	10.3%	7.8%	11.5%
5. よくわからない変わり者だった	5.5%	16.1%	21.2%
6. その他	1.9%	5.0%	2.9%

が殆んどであったが、担当教科で社会、数学、理科の先生が指導されている場合も結構あるようである。

指導にあたった人々は、きびしくて、熱心で、練習に毎日参加し、技術、理論もかねそなえた、尊敬される人物であったと答えている。

運動部に入部しなかった理由として「運動が苦手であったから」が小学校で4割、中学校で5割いるが、特に小学時代から苦手意識を持たせてしまっていることに問題があるように感じられるのであるが。学校のスポーツの危機としてよく指摘される勝利至上主義が生み出したもの考えるのは考えすぎであろうか？

運動部に入部したが、わけあって途中で退部したと答えた人に、その理由を聞いたのが表17の通りである。ここでは、クラブの雰囲気嫌

表11. 指導者の職業について

	小学	中学	高校
1. 学校の先生	61.7%	83.2%	77.0%
2. 学校の先輩	3.5%	7.9%	12.0%
3. 地域のサラリーマン	11.6%	3.4%	2.6%
4. 地域で自営業している人	16.7%	3.7%	3.8%
5. スポーツ・センターの指導員	3.5%	0.3%	0.8%
6. その他	2.9%	0.9%	3.8%

表14. 指導者の参加状況

	小学	中学	高校
1. 毎日練習に出てきた	68.6%	48.1%	43.3%
2. 週3日以上は出てきた	10.0%	25.1%	24.9%
3. 週に1日から2日は出てきた	14.3%	16.9%	16.9%
4. 時々、試合前に出てきた	2.3%	6.7%	9.0%
5. 試合のときだけ出てきた	1.0%	2.1%	3.4%
6. その他	3.7%	0.9%	2.3%

表15. 指導者のスポーツ技術の実力について

	小学	中学	高校
1. 技術、理論ともすばらしかった	56.6%	46.3%	46.4%
2. 技術はまあまあだったが理論が駄目	13.6%	9.1%	12.4%
3. 理論はすばらしかったが実技は たいしたことなかった	15.0%	26.1%	20.4%
4. 技術、理論とも駄目だった	8.0%	15.4%	18.4%
5. その他	6.6%	2.8%	2.4%

表16. 運動部に入部しなかった理由

	小学	中学	高校
1. 運動が苦手だったので	39.0%	50.0%	44.0%
2. 病弱だったので	11.7%	18.0%	8.9%
3. 希望するクラブがなかったので	20.0%	13.6%	13.0%
4. 受験勉強のため	1.9%	2.2%	13.0%
5. 運動部の雰囲気が嫌いだったから	12.0%	13.6%	11.1%
6. 両親が反対だったから	0	0	0
7. その他	15.7%	11.5%	8.9%

表17. 運動部を途中で退部した理由

	小学	中学	高校
1 指導者が嫌いだったから	9.7%	15.0%	26.0%
2 クラブ仲間がきらいだったから	32.0%	13.0%	6.4%
3 クラブの雰囲気が嫌いだったから	13.0%	31.0%	28.0%
4 からだを悪くしたから	16.1%	10.2%	6.4%
5 家の人が反対したから	3.2%	2.6%	2.1%
6 学業成績が下がったから	3.2%	7.7%	6.4%
7 限界を感じたから	12.9%	15.3%	15.0%
8 その他	9.7%	5.1%	10.6%

いだったと答えた人が3割もいた。その内容については、具体的に調査していないが、大学の運動部などでもよく耳にする事である。また、特に気になるのが、小学生、中学生で「限界を感じた」という人が1割強もいたことである。

大学へ入学して運動部へ入部したかどうかについて聞いた結果が表18の通りである。

江刺正吾は、大学に関する過去のデータでは、男子で10.6%~40%の巾があり、非常にばらつきが大きいがおよそその所属率は、20%~30%

表18. 大学へ入学して

運動部に入った	112人 (28%)
々入らなかった	291人 (72%)
運動部に入ったが止めた	19人 (5%)

表19. 入部した運動部

①合気道	5人	⑩バスケット	5人
②ウェイトリフティング	3人	⑪バドミントン	8人
③オリエンテーリング	6人	⑫バレーボール	7人
④空手	4人	⑬ハンドボール	3人
⑤弓道	2人	⑭硬式野球	4人
⑥サッカー	2人	⑮ラグビー	3人
⑦柔道	5人	⑯陸上競技	8人
⑧スキー	5人	⑰レスリング	7人
⑨スケート	2人	⑱ボート・カヌー	1人
⑩相撲	3人	⑲ゴルフ	4人
⑪ソフトボール	5人	⑳ボクシング	0人
⑫卓球	6人	㉑ダンス	0人
⑬軟式テニス	6人	㉒水泳	0人
⑭硬式テニス	8人	㉓体操	0人
⑮登山	3人	㉔その他	16人

表20. 入部の動機について

1. 運動が好きだったから	44%
2. 友達に誘われて	14%
3. 先輩に進められて	11%
4. 運動部員に強く誘われて	15%
5. 運動不足だったから	6%
6. 就職に有利と思ったから	0%
7. その他	11%

表21. 過去の運動部と入部した運動部との関係

1. 高校時代まで続けてきた運動と同じもの	50.5%
2. 高校時代まで続けてきた運動と異なるもの	49.4%

表22. 運動種目をかえて入部した理由

1. 同じ種目の運動がなかったから	20.0%
2. 新しい種目を経験したかったから	56.3%
3. 今までに十分経験できたから	1.8%
4. 運動部が誘わなかったから	3.6%
5. その他 (具体的に)	18.1%

と考えられると述べている。愛大の運動部所属率は平均であると言えよう。

運動部の選択はいろいろで、平均して入っていたが、ブームも手伝ってか硬式テニスに入部者が多くいた。入部の動機は、当然のことながら、運動が好きだったからが半数近くを占めていたが「誘われて」と答えたものも4割いた。自主性がないと一概には言えないが、毎年入退部で問題が生じているだけに釈然としないところでもある。

運動部を選択するときに過去の経験を生かして技術の追求を、仲間を得ようとするものと新しいものへの挑戦をするものが半々であった。少年時代に色々なものを経験して、その中から

自分に合ったもの、時代に即応できるものと、だんだん大きくなるにしたがって自分のすすむ道はきまってくるものと思うのだが、大学に入ってから新種目に挑戦しなければならないところに、小学時代・中学時代の課外体育に問題はないのだろうか、小学生の全国大会等はやりすぎと思っている。

江刺正吾によると、学生は、スポーツに対して極めて好意的な反応を示している。これまでの調査によると、90%以上の学生が「スポーツが好き」と答えている。また学生生活にとってスポーツは必要であるとする学生が約90%いると述べている。そのことからするとこの調査で「好きでない」としたものが17%もあった。運

表23. 運動部へ入部を拒否した理由

1. 運動が嫌いだから	7%
2. 自由な学生生活がしたかったから	31%
3. 経済的な理由から	4%
4. 運動部独特の上下関係が嫌いだから	16%
5. 勉強を一生懸命やりたいと思ったから	4%
6. 今更きついことは仕度くないと思ったから	12%
7. 通学距離が遠く、活動の時間がないから	12%
8. 健康に自信がないから	2%
9. 入りたいクラブがなかったから	11%
10. いい指導者がいなかったから	2%
11. 病気だったから	1%

表24. 運動部を途中で退部した理由

1. 運動部の雰囲気馴染めなかったから	14人
2. 勉強が出来なかったから	13人
3. 経済的な理由から	6人
4. 体を悪くしたから	3人
5. 力に限界を感じたから	2人
6. 指導者の指導方法に疑問を感じたから	6人
7. 上下関係が嫌いだったから	5人
8. 運動施設の面から十分に練習出来なかったから	1人
9. 上下関係がなかったから	0人
10. ルーズなクラブだったから	2人
11. その他	7人

動部への所属率が中学、高校、大学で進むにしたがって、低下して来ることは、江刺正吾の調査などでも指摘されているし、本校が行なった昭和57年の調査でもその傾向は現われている。しかし運動部へ入らなかった理由として「自由な学生生活がしたかったから」とか「運動部独特の上下関係がイヤだったから」というものが47%いた。運動部の運営の面からも考えてみなければならぬことであろう。「今更きついことは仕度くないと思った」も12%あった。自由に、面白可笑しくという学生気質といままでがやらされてきた運動だったのではと思ったり

表25. 運動の「好き」「嫌い」について

1. 運動は大好きです	112人 (26%)
2. 運動は好きです	242人 (57%)
3. 運動はあまり好きではない	70人 (17%)
計	424人

している。途中で退部したのも、運動部の雰囲気が馴染めなかったとするものが多く、こちらに運動部がかかえる大きな問題があるように思っている。勉強ができなかったからと答えたもののほとんどが、授業に出席することができない状態にあるようである。学生生活の中のスポーツが担う意味を考えればすぐわかることであると思うのだが、体育会に考えて欲しいところである。

次に「スポーツ・マン」といったときに、一般的に学生はどのような感想を持ったのだろうかと思い調査したのが次の通りである。

スポーツ活動によって得るものが、心理的、身体的、文化的、社会的な面に於て多いことを理解し、スポーツ・マンと言われるものに対しても尊敬の念を抱きながら、いざ己れが実践しようとするところでは躊躇してしまう。なにがこの様にしてしまったのであろうか。スポーツそのものではなく、スポーツをとりまく環境、

表26. スポーツ・マンに対するイメージについて

	そう思う	思わない	わからない
1. スポーツをすると健康になる	76%	12%	11%
2. スポーツをすると体力が強くなる	86%	8%	6%
3. スポーツをすると精神力が強くなる	66%	19%	15%
4. スポーツをすると礼儀正しくなる	37%	43%	25%
5. スポーツをすると正義感が強くなる	20%	53%	27%
6. スポーツをすると長生きする	20%	51%	29%
7. スポーツは気分がいい	75%	13%	12%
8. スポーツ・マンはずるい	13%	54%	33%
9. スポーツ・マンは頭が悪い	12%	63%	25%
10. スポーツ・マンは勉強しない	18%	63%	19%
11. スポーツ・マンは不潔である	10%	68%	22%
12. 大学期に運動して汗を流すことに意味があると思いますか	50%	18%	32%

そして青少年の過ごしている社会構造，組織が生みだした問題であろうか。

#### 4 ま と め

大学生の運動部離れの原因を追求する手掛かりとして、アンケート調査を試みてみたのですが、今一つはっきりしない謎解きに終わってしまった。

今回の調査によって、学生の平日の生活時間の中で、通学によする時間が多いいということがわかった。また、大学では、のびのびと自由な生活を満喫したいという気持が強いこともわかった。

運動が好きで、体力にも自信があり、運動神経もよかったので、運動部に入って活動してい

た。指導者は尊敬できる人であったし、毎日一生懸命、上手になるために練習してきた。大学に入った今でも、運動は好きである。スポーツ活動によって人間が受ける効果についての知識もあり、スポーツ・マンに対する考え方も、肯定的な考え方をしている。しかし、実践となると「今更、苦しいことは」と逃げているのである。

#### 参考文献

- 1) 江刺正吾「学生の生活とスポーツ」道と書院
- 2) 昭和59年度青少年白書，総務庁青少年対策本部，大蔵省印刷局
- 3) 新井野洋一：体育実技受講学生に関する基礎的検討，第1回調査報告書，愛大体育研究室